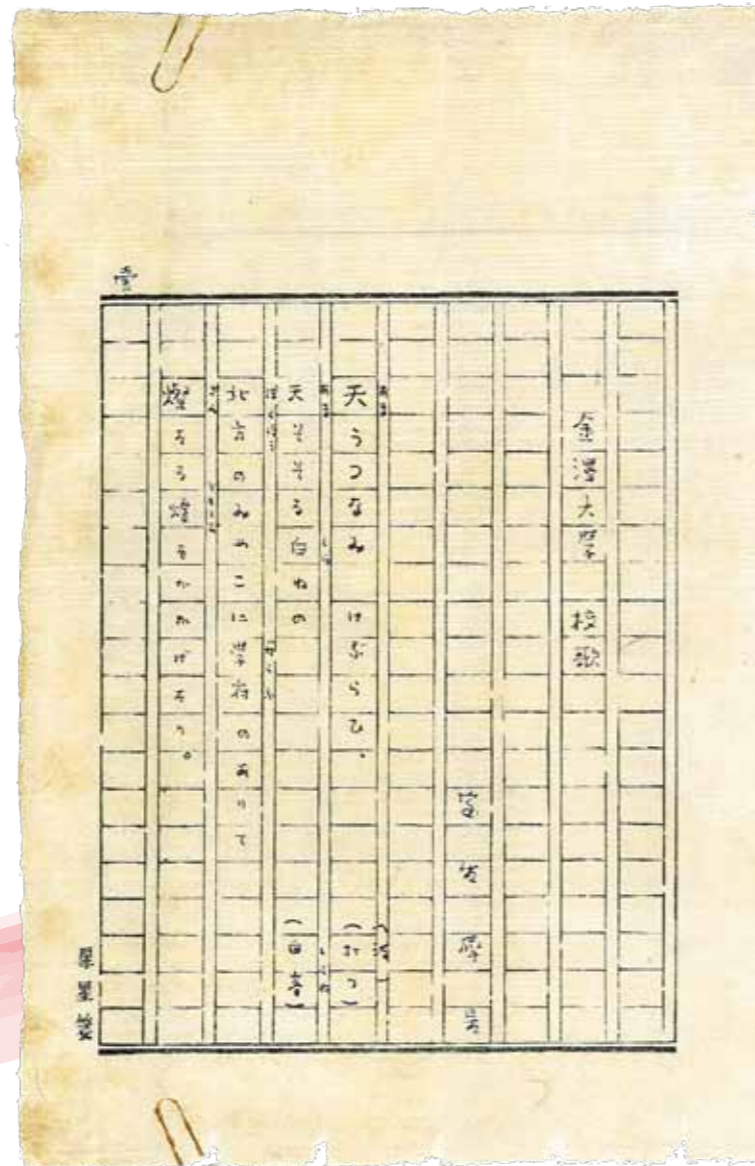


1. 新制・金沢大学誕生 — 兵隊の住処から学生の住処へ

金沢大学は戦後間もない1949(昭和24)年5月に、第四高等学校、石川師範学校、金沢高等師範学校、石川青年師範学校、金沢医科大学、金沢工業専門学校といった石川県内の高等教育機関を統合する形で、明治以降第九師団本部や第七歩兵連隊の駐屯地として利用されてきた金沢城跡をメインキャンパスとする新制大学として誕生しました。

新たな「金沢城の主」となった金沢大学は、ドイツのハイデルベルク大学と並ぶ「お城の中の大学」として全国に名を馳せました。日本国内には他にも旧城跡に建てられた大学はいくつかありますが、金沢大学ほど城の遺構がキャンパスに残されているところはなく、城門をくぐって「登城」という、ちょっとした侍気分を味わえたのは、日本広しといえども金沢大学くらいのものでした。



金沢大学創成期には、日本経済全体が疲弊していたため新たに施設を建てることもままならず、城内にあった旧陸軍の建物をそのまま利用していましたが、それらの多くは明治期に建てられた木造建築で老朽化もはなはだしかったため、1960年代頃までには鉄筋コンクリート造りの新しい建物が順次整備されていきました。しかしそれでもなお、後々まで旧陸軍時代の建物が残っていることもありました。そうした建物の一つに文化サークル連合の部室として使われていた「文サ連サークル棟」(通称「サークル長屋」)がありました。この建物は角間キャンパス移転時まで残っていましたが、相当老朽化して薄汚れた感じに見える建物でした。ある日ひとりの学生が観光客から「三十間長屋」(金沢城時代の建物で重要文化財に指定)の場所を聞かれたのですが(兼六園が橋を渡った向かいにあるため、キャンパス内にもよく観光客がいました)、その学生は「三十間長屋」のことをよく知らず、「長屋」という言葉から想像して「サークル長屋」に案内したそうです。どうみても安っぽそうな老朽化した建物を見た当の観光客は、果たしてどう思ったのでしょうか。

